

説経浄瑠璃鑑賞会

（説経節と日本舞踊の共演）

令和三年一月二十三日（土） 十三時三十分～ 成増アクトホール

説経節

小栗判官一代記―鬼鹿毛曲馬の段―

三代目 若松若太夫

説経節・舞踊

葛の葉―子別れの段―

三代目 若松若太夫
舞踊 坂東富起子

黒衣 坂東辰起
黒衣 竹内絢香
協力 古屋和子
白狐の面製作 泉屋志也
眷属狐の面・狐火製作 深川信也

解説 日本大学芸術学部教授 上田 薫

主催 板橋区教育委員会／共催（公財）板橋区文化・国際交流財団



あらすじ

◆小栗判官一代記 鬼鹿毛曲馬の段 おぐりはんがんいちだいき おにかげきよくば だん

鞍馬の毘沙門天の申し子として生まれた小栗判官政清は、その奔放な行いから帝の勘気を受け、常陸の国へ流罪となります。その後相模国の横山将監の息女照手姫へ押し入り婿となつて居座りますが、横山一党の恨みを買います。将監や照手の兄の三郎は馬術を所望し、人食い馬の鬼鹿毛に小栗を喰わせようとします。小栗は座敷から厩へ向かいますが、その中の萱原には鬼鹿毛に喰われたと見える生き物の骨が散乱しています。鬼鹿毛の厩はまるで獄屋のように堅牢な造りで鬼鹿毛はしっかりと鎖で繋がれ、人の気配を感じ、人秣(ひとまぐさ)かと喜んで嘶きます。

小栗は鬼鹿毛を恐れることなく耳元でささやきます。自分に乗せるならば、御堂を建て、鬼鹿毛を馬頭観音として祀ると約束します。果して小栗は鬼鹿毛に跨り桜の馬場に乗出だします。馬場には横山一統が居並び、小栗が鬼鹿毛の餌食となるのを見物しようと待ち構えております。小栗の運命や如何に…。

◆葛の葉 くず は 子別れの段 こわか だん

「葛の葉」は、有名な陰陽師安倍晴明の母が和泉国信太の杜に棲む狐だったという伝承にもとづくお話ですが、今回若太夫が語る説経節は竹田出雲の浄瑠璃『芦屋道満大内鑑』を元にしていて、少々複雑な筋となっています。晴明(この作品では童子丸)の父安倍保名は信太の杜で、死んだ恋人の榊と瓜二つの女性と出会います。それは榊の妹「葛の葉」でした。保名と「葛の葉」は互いに心を惹かれあいますが、「葛の葉」には石川悪右衛門という結婚を執拗に迫る男がおり、偶然狩りで狐を追いかけて信太の杜にやってきました。保名は追われた狐を助け、「葛の葉」を逃して悪右衛門を撃退するのですが、ここで助けた狐が「(狐)葛の葉」に化けて保名と夫婦になります。狐が化けているとは知らずに子供までもうけて6年の時が流れます。ある日、本物の「葛の葉」が保名の元を訪れます。本物が現れ、居ることができなくなった「(狐)葛の葉」は「恋しくば尋ねきてみよ和泉なる 信太の森の恨み葛の葉」の歌を残して立ち去ります。ことの次第を知った上で、狐の子供の母になろうとする本物の「葛の葉」ですが、乳を欲しがると子供のために保名と「葛の葉」は信太の杜に出かけてゆきます。

今回は若松若太夫の語り、坂東富起子さんの舞踊でお楽しみいただきます。

上演作品について

説経節は、語り物文芸に属しているため、物語が作られた経路がたどりにくい芸能と言えます。今回の演目『小栗判官』も『葛の葉』も、室町時代のいずれかの時期にその原型が作られたと推測されますが、正確なところはわかっておりません。『小栗判官』は室町時代中期に実在した小栗助重という人物をモデルとして作られた話とされ、現在の茨城県筑西市には小栗城跡がありますし、神奈川県藤沢市の時宗藤沢山清浄光寺（通称遊行寺）長生院には小栗判官や照手姫、更には今回登場する鬼鹿毛を祀った供養の塔なども残されています。『小栗判官』は説経節の中でも物語の完成度が高く、エンターテインメント性の高い作品として歌舞伎や芝居などで長く愛されてきた物語と言えます。一方、今回演じられる説経節『葛の葉』は、「あらすじ」でもふれておりませんが、江戸時代中期（享保19年・1734年）に元祖竹田出雲によって上演された浄瑠璃『芦屋道満大内鑑』の影響が色濃く残る作品です。『葛の葉』は延宝年間（1673年～1680年）に幾つかの古浄瑠璃正本が残されているのみで、説経節としての古い正本は確認されていません。古浄瑠璃では「しのだづま」などと題され、出雲作のように二人の「葛の葉」が登場する筋はありません。晴明の父・保名に助けられた狐が、化けて夫婦となり子供（後の安倍晴明）をもうけますが、正体を見られて歌を残し、信太の杜に帰ってゆくという粗筋になります。現存している古浄瑠璃「しのだづま」も、詞章の特徴としては、余り説経節風ではなく、五説経の中に数えられる作品としては、異色だと思われず。しかし、特に「葛の葉子別れ」の段は、寛政期以降の説経節や替女歌などで盛んに歌われ、昭和頃までは広く知られた物語でした。どちらも今日余り語られることのない物語ですが、若太夫と坂東富起子さんの新しい演出で、古い物語の中に新たな魅力を発見していただければと存じます。

（上田 薫）

説経浄瑠璃について

説経節は、鎌倉時代に僧侶が庶民に教典の教義を説いた「説経(教)」が芸能化したものです。室町時代に「さんせう太夫」「小栗判官」「石童丸」「くずの葉」「しんとく丸」など五説経といわれる物語がつくられました。近世初期に流行したのち一時衰退しましたが、寛政の頃江戸で再興され、明治・大正・昭和にかけて初代若松若太夫が活躍しました。初代の没後、二代目若松若太夫は一旦廃業しますが、昭和五十年代に再び語りを復活させました。その後三代目若松若太夫がその芸を受け継ぎ、現在活動をしています。また、現在日本の大衆芸能「演歌」の源流としても注目を浴びています。

出演者紹介

【 三代目 若松若太夫 】

本名：小峰孝男

平成元年 國學院大学在学中に説経節を研究するため、二代目若松若太夫を尋ねたのが縁で門弟となる。

平成2年 説経節は若松峯太夫を、三味線は柏木孝司を襲名。

平成7年 二代目若松小若太夫を、平成10年には三代目若松若太夫を襲名する。現在、後継者の育成並びに関係省庁・都府県・市区町村、寺社、学校等の公演依頼に広く対応している。

平成11年度 東京都指定無形文化財（芸能）保持者認定

平成12年度 板橋区登録無形文化財説経浄瑠璃保持者認定

平成19年 埼玉県文化ともしび賞受賞

平成26年 民俗芸能大会関東ブロック大会東京代表



ゲスト紹介

【 坂東 富起子 】

板橋区在住。日本舞踊坂東流師範。振付家。昭和音楽大学講師。

古典舞踊を伝承しつつ、創作舞踊や演劇、ミュージカルの台本、演出、振付、ステージングにも携わる。

日本舞踊を坂東梢師に師事。地唄舞を吉村流五世家元・吉村雄輝夫師に師事。また狂言を茂山千之丞師、暗黒舞踏を土方巽師に師事。

平成19～21年 日本舞踊協会主催・文化庁後援の全国各流派合同新春舞踊大会で三年連続大会賞・芸団協奨励賞を受賞。21年度は併せて会長賞を受賞。



解説者紹介

【 上田 薫 】

日本大学芸術学部教授。1964年生。アラン（エミール・オーギュスト・シャルティエ）研究として、著書『布切れの思考-アラン哲学に倣いて-』（江古田文学会）、『感性の哲学アラン』（宝塚出版）。森有正研究として、

著書『コギトへの思索-森有正論-付・アランを廻る対話』（江古田文学会）。一遍研究として、共著『一遍上人と遊行の旅』（松柏社）などがある。論文では、「一遍上人と芸能民との距離」「一遍上人の思想と修験道」

「一遍上人と連歌師との関係性について」「説経節成立の経緯と『陰惨な色あい』についての一考察」「『一遍聖絵』を読み解く（一）」、江古田文学102号で「特集 説経浄瑠璃 三代目若松若太夫」を企画編集。

